

生涯學習情報誌

Life Learning

6 2019
Jun.
NO.346



二十歳の「食生活アドバイザー®検定」が、次代へ向けて船出

■20年でも有資格者が11万人超に

令和の幕開け直前の4月20日、FLAネットワーク協会の「食アド二十歳 謝恩パーティー」が、東京・新宿にて開催された。協会は1999年に設立され、同年に財団協賛会員となり、以来20年、40回の食生活アドバイザー（食アド）検定を通して生涯学習推進に貢献してきた。

謝恩パーティーには、団体受験に長年取り組む学校や企業、講座普及や通信講座にも取り組むパートナー、公式テキスト等の出版関係、協力企業、そして食アド公認講師と協会スタッフら約80名が全国から集まった。1999年の第1回検定（3級のみ実施）の受験者は231名だったが、近年の検定では（2級、3級、基礎の合計で）2万人前後まで増え、通算で約23万人が受験、合格した食アドはのべ11万8663名となった。

■食を通して問題解決できる人材を育成

竹内弘光会長は謝辞の中で、第40回検定に食アドの使命を問う出題をしたと明かした。その答えは「ミールソリューション」。個人が持つ様々な食に関する問題について解決策を考え、提案することが、食アドの重要な役割としている。

毎回、上は80歳代から下は小学校5、6年生まで受験者が幅広いのが特徴のひとつ。最上級の2級は、栄養士、調理師、飲食関係、食品メーカー、生産・流通に関わる人たちが、食のプロとしての知見を広げる目的が多い。3級は受験者が多く多様だが、自分自身や家族の健康維持に関心が高い

●一般社団法人 FLAネットワーク協会
〒160-0023
東京都新宿区西新宿7-15-10 大山ビル2F
TEL : 03-3371-3550
URL : <http://www.flanet.jp>
1999年 協会設立
1999年 財団資格認定団体登録
2009年 一般社団法人設立
代表者：会長 竹内弘光



財団事務局長・佐藤梨奈も理事長代理として出席し祝福した



公認講師・スタッフと共に謝辞を述べる竹内会長



会長の竹内弘光氏

層が中心となっている。基礎検定は、2005年の食育基本法制定に応じて開始した、中高生から受験することができる、食育のための検定だ。

■人との出会いを大切に歩んだ20年

竹内会長は「自分は本当に人に恵まれた。団体受験先、事業のパートナー、協力企業、公認講師・スタッフ、そして全国で活躍する食アドの皆さんに支えていただき、二十歳まで育ててくださったことを感謝したい」と述べた。しかしそれは、協会と竹内会長が、出会ったご縁を大切にしてきたことの裏返しでもある。この日の出席者の笑顔、第1回の検定を受けた人が何人もいたこと、パートナーや協力企業、公認講師らも一度つき合いを始めたら、途中でやめることはほとんどないという事実がそれを証明している。

■食生活学と食アド問屋制の確立が次のテーマ

「私の夢であり、協会の次の使命と考えているのは『食生活学』の確立です。食を学ぶ人たちが目指せる学位として成長、普及させたいのです。現在も多くの高校・専門学校・大学で団体受験をしてくださっていますが、より多くの学校で授業に取り入れていただくことが前提となると思います。そして指導者である公認講師の育成も不可欠です。それらも一歩ずつ進んでいます。」

もうひとつ、2008年に始めた食アド会員制度を、食の問題に悩む人と解決できる食アドをつなぐ『食アド窓口問屋制度』として発展させ、より社会に貢献していきたいと考えています」

風力発電とオーガニックコットンで「さすけねえ」福島を

2019年5月11日、福島県南相馬市の太平洋に近い元水田で、オーガニックコットンの種まきイベントが行われた。

南相馬市と東京都杉並区の小学生が交流する「トモダチプロジェクト」の公演も兼ね、東京からバスで約50名、地元からも約50名が参加した。主催したのは、合同会社SUSKENERGY。2月に行われたソーシャルビジネスグランプリ2019で、グランプリと共感大賞をダブル受賞した渡邊千春さんが代表を務める会社だ。

■自分でやるしかない！

渡邊千春さんは福島県二本松市の出身。東日本大震災では原発事故の影響で多くの人々が避難をした。渡邊さん自身は東京でGEキャピタルに勤めていた。復興の役に立ちたいとGE内で風力発電を扱う部門への異動を希望した。津波で海水をかぶった南相馬市の水田での風力発電とオーガニックコットン栽培を、復興事業にしようとしたのだ。風車には多様な部品が使われ、ものづくりの得意な

浜通りの企業と協働できるかもしれないと考えた。

順調ではなかった。事業者の核となる大手企業が、福島の沿岸部の風は風力発電には弱いと判断し撤退してしまう。みんなの期待をおろした責任もある。GEをやめ自分で立ち上げようと決意したのが2017年。企業名の「サスケナジー」は、福島の方言で大丈夫を意味する「さすけねえ」と、サステイナブル、エナジーの造語だ。渡邊さんの他に地元の農家、建設業者、弁護士、そしてオーガニック

コットン事業の先駆者・アバンティの渡邊智恵子社長も「縁を得て加わった」。

■安心な事業をどう組み立てるか

産業化には津波をかぶった水田だけでなく広大な綿花畑が必要だ。それを実現していくには地元の住民や農家の理解・協力が欠かせない。農家の稲作以上の収入を可能にするのが、風力発電であり、

参加した約100名

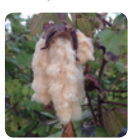


テーマソングで踊る小学生



種まき中

この日種を巻いたのは日本古来種の綿の一種で、通常より茶色味を帯びているのが特徴だ。自然の色を活かした希少価値のあるコットン製品を企画していく。



渡邊氏はトレイルランの第一人者でもある



■連絡先

Mail: chiharu.watanabe@gmail.com

付加価値の高いオーガニックコットンの製品化だ。ドローンやAIを活用した農作業の省力化にも取り組んでいる。多くの人から出資を募るには、収益は風まかせとはいかないと考え、リスクヘッジのための保険も交渉し内諾を得た。

実は弱点とされた福島のそよ風は強みでもある。風車の羽根や支柱に与える負荷が少ないため、大型風車による大容量発電ができるのだ。最大高200mの1号機が3、4年後に立つ予定だ。

■グランプリ獲得をきっかけに

グランプリ受賞は、半信半疑の地元の人たちに「良いことやってるんだな」と信頼してもらうための勳章になればと期待している。副賞である生涯学習開発財団の起業助成金は、種まきイベントで東京の小学生を招待する費用などに使われた。

海水をかぶった田んぼを生かす。県内の製造業から部品調達して風車を動かす、安全なエネルギーを供給する。持続可能な産業を起し雇用を創出する。愛されるオーガニックコットン製品を広める。地元の人々が安心して資産運用できる投資商品にもなる。福島のそよ風が起こす夢のプロジェクトが動き出した。

シリーズ

社会起業家

合同会社SUSKENERGY 共同創業者兼CEO

渡邊千春氏に聴く

祝

2018年3月 東京大学博士号(保健学)取得

戸部浩美さん(取得時53歳)

【論文テーマ】育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムの効果——怒りの情動に焦点を当てて——ランダム化比較試験
自分の研究の意義を信じ、どう社会を良くすることにつなげるか

■子育てだけでなく、自身を見つめ直すプログラム

東京大学のGNRC(グローバル・ナッシング・リサーチセンター)特任助教が戸部浩美さんの現在の肩書。自身の研究推進とともに、通訳・翻訳の経験を活かし、外国からの要人や研究者をアテンドする機会も多く、やりがいを感じる仕事だ。

取材直前の週末、戸部さんは「イライラ・怒りを笑顔に変える」感情の整え方・癒やし方」と題した講演会・研究報告会を、茨城県牛久市で行った。会場には、研究協力者のほか育児や家族関係で悩む母親を中心に、150名以上が訪れた。

戸部さんは、育児中の親のレジリエンス(精神的回復力)を高めるプログラムを開発し、地元である牛久市と、市民活動が盛んな静岡県三島市において、子育て中の親を対象に、プログラムの効果を見る介入研究を行なった。茶話会で話し合うグループと比較して、プログラムを受けたグループは、介入直後、2か月後において、レジリエンス、怒りのコントロール、コーピングなどが有意に改善。特に自尊心は、直後よりも2か月後にさらに大きく改善していた。親が自分を大切にすることが、子どもの自尊心やレジリエンスを高めることを理解したのだろう。

■4人の子の母親から東大博士課程へ

4人の子供を育ててきた戸部さん。子育てをしながら塾を開く中で、不登校の子供や子育てに悩む母親に頻繁に出会った。自身の経験も含め、悩んだり思いつめたりする親の支援をしたいと考え、茨城県立医療大学で看護学を学んだ。家事をしながら昼間



理論や正論で終わらず、自身の失敗談や参加者の変化を伝え、「私にもできるかも」と思ってもらうことが鍵。

■より広く役立つためのワークブックも開発中

悩んでいるのはまじめなお母さんが多い。将来への不安やしつけなくてはという責任感から、つい怒ってしまう。正しいことでもぶつけてしまうと、子どもの脳にダメージを与え逆効果になることも多

い。怒りに気づき対処や伝え方を変えること、見方を変えることで怒りにくくなることがプログラムの目的の一つだ。頭ではわかっているのに、がんばっているのに、うまくいかないと悩む人も多い。繰り返し学び、実践し、振り返ることが大切だ。

アンケートでは親子のことだけでなく、「夫婦仲や嫁姑関係が良くなった」「切れやすい社会なので皆が学んでほしい」「自分も人に教えたい」など、うれしい声がたくさん届いている。現在、講演のほか、保健師さんの指導やお母さん同士のグループ学習に使えるワークブックを開発中だ。夫婦で書き込んで理解し合うようなシーンも想定している。

■四の五の言わずにやってみる

「助成金の多くが年齢制限があるため、ために『50歳 研究 助成金』とネット検索したら出てきたので驚きました。松田妙子先生には『博士号を取って終わりではなく、そこからがスタート』と強く励ましをいただきました。それがあったからこそ、思いがけず、今のポストをいただけたと思います。松田先生の遺志を多くの女性と分かち合い、子育ての悩みを和らげるとともに、自分の人生をどう歩みたいかを考えるお手伝いができたらと願っています。

無理・無駄・無謀と言われても、四の五の言わずにやってみるのが私のモットー。多くの方に支えられ、信じて続けたことで博士号に届き、思ってもみなかった扉が開かれました。自分の研究の意義を信じ、成し遂げ、どう社会を良くすることにつなげるか、常にフォーカスしていくことが大切です」

入江 恵さん (学習院大学 国際社会科学部 教授)

高齢者を対象とした幸福度を高める 外国語学習開発に向けて——ライフストーリーナラティブの構築——

入江 恵^{けい}氏は、学習院大学に2016年に新設された国際社会科学部の教授である。本研究の目的は、超高齢社会になりつつある日本の高齢外国語学習者が、なぜ外国語を学びたいと思っているのかを探る。その動機付けを Subjective Well-being (主観的幸福感) (SWB) を用いて捉えることができるかどうか。また、高齢者特有の要因である「加齢」と「学習」に関しての主観がどのようにSWBに関係しているのか。それぞれの人生体験がどのように外国語学習につながったのかを、主に臨床心理などで用いられてきた質的調査法 Life Story Narrative 分析 (ライフストーリーナラティブ) (LSN分析) を用いて調査する。

■高齢者学習に対する関心の高さを実感

2019年5月11日、学習院大学にて、「Research Forum: Foreign language learning in the later stages of life」を開催した。これは、今まで英語教育や第二言語習得、応用言語学といった領域で、研究がほとんどされていない、高齢言語学習者に関する研究についての意見交換を、英語で行う研究報告会である。

第1部は平安女学院大学の松本ドロタ氏による、ポジティブ心理学の中でも特にsavoring (味わう) コンセプトから高齢学習者を考察した研究発表が、第2部では、生涯学習開発財団の研究助成金を受けて開始した質的研究調査の報告が行われた。この報告は、主な目的である研究手法試用に焦点をあて、共同研究者である早稲田大学のライアン・ステイブン氏、宮城学院女子大学の木村春美氏、そして入江氏の3名で行わ



↑ 松本ドロタ氏による研究発表



↑ 左から、入江氏、ライアン氏、木村氏

Research forum:
Foreign language learning in the later stages of life

Date: May 11, 2019 (Saturday)
Place: Gakushuin University, Meiji Campus, Minami (South) 2 Bldg., Mtg Rm 1 (4F)
No.8 on the interactive map

Talk 1: 14:00 – 15:00
“Exploring foreign language learning in the third age through narrative approach”
Dorota Matsumoto
Heian Jogakuin (St. Agnes') University

Talk 2: 15:15 – 16:00
“Exploring the potential of life story interview approach: A pilot study on older learners of English”
Stephen Ryan
Waseda University
Kay Irie
Gakushuin University
Harumi Kimura
Miyagi Gakuin Women's University

Q&A: 16:00 – 16:30
Contact: j.matsuda@gaikyo.ac.jp

→5/11の研究報告会の案内

れた。研究会には約15名が参加。遠くは福島県からの来場者もいて、予定の時間を過ぎるほど活発な質疑応答が続いた。「限られた告知にもかかわらず、これだけの人に来ていただけたのは、高齢者学習に関する興味が高いことを実感しました」と入江氏。

■学習を続けることが認知能力の保持・向上にも

高齢者人口比率の増加はネガティブに捉えられ、どう解決するかというのが従来の議論だった。しかし教育老年学 (Educational Gerontology) においては、か

なりの高齢者となっても学習を続けることが可能で、学習すること自体で認知能力の保持と向上を予測できるとしている。本研究も、高齢者人口比率の増加を新しい社会のあり方として受け止め、高齢者の特徴を理解し、教育、中でも言語教育に何ができるのか、ポジティブな貢献を考察していくことを大きな目的としている。

■高齢者でも？ 高齢者だから？

研究では42歳から86歳の英語学習者5名に、ライフストーリーインタビューを行った。ストーリーは分析中だが、まずはこのインタビュー手法の良い点と課題が見えたのは収穫となった。言語学習に関する質問の前に、人生を振り返って話していただくことで多くの情報を引き出し、それまでの人生と言語学習との関わりを分析する上で大変重要であると、3人の研究者が実感し、自信を深めることができた。

最後に、宿題や予習をしっかりと英語を受講する70歳男性の、2つの言葉を引用して議論をした。

「当てられて、答えられないのは恥ずかしいもんだよね。俺60ぐらいの時そうじゃないと思ってたの。ところがね、60なって、70なってもね、当てられてしゃべれないのはね、恥ずかしいもんですよ」
「長続きする講座ってあるんですかね？ てのは、英語は難しいから長続きすると思うんですよ。難しくないかったら、2、3年で終わりですよ」

年齢に関係ない側面と、高齢者ならではの学習者心理が、よく伝わってくるのではないかな。

